２０１２年度

日本福祉大学通信教育部
東京地域学習会

べてるの家の非援助論について

～当事者主体の援助と認知行動療法～

担当教員

元岡　征志 先生

平澤　恵美 先生

＜日程＞２０１３年３月９日（土）
＜会場＞東京スポーツ文化館　２F
クリエイションスペース
東京都江東区夢の島 2-1-3
電話番号(代表)：03-3521-7321

★地域学習会テーマ

べてるの家の非援助論について

「当事者主体の援助と認知行動療法」

★はじめに

―べてるとは―

「浦河べてるの家」がある北海道浦河郡浦河町は，襟裳岬にも近い北海道の東南に位置し，人口は１万４千人ほどの町であるが，周辺では日高昆布をはじめとする海産物やサラブレッドなど競走馬の産地としても有名である。

また，広義の意味で「べてる」の活動は，カフェ，昆布などの水産物の加工，環境清掃，製麺などを行う就労支援事業所とグループホーム４棟，共同住居３棟を提供する生活支援事業所を行う「社会福祉法人　浦河べてるの家」，福祉用品の販売を行う「有限会社　福祉ショップべてる」，当事者の企業家たちが活動する「協働オフィス いいっ所」，当事者の自助活動グループの「ＮＰＯ法人セルフサポート浦河」などからなるコミュニティをいう。主に精神障害者が地域で活動する場の多種多様な事業を行い，10 代から 70 代まで約 200 名が活動している。

2009 年 7 月には，「カフェぶらぶら」という店舗（カフェ＆レストラン，物販）がオープンし，当事者が接客と運営に携わっている。**（本学ホームページより引用）**

画像はべてるホームページより引用

★学習目標

精神障がい者の地域生活支援システムの実態と今後への課題について考察する。

★学習プログラム★

１．事前課題

課題図書を通読し，学習会の参加の目的と，獲得目標を考える。

課題図書：　『べてるの家の「非」援助論』　（医学書院）

『べてるの家の当事者研究』　（医学書院）

『技法以前』　（医学書院）

上記３冊より，１冊程度

２．講義および演習

３月９日（土）　　タイムスケジュール

（当日の進行などにより変更になる場合もあります）

午前の部

９：３０　　受付開始

資料配布

１０：００　　自己紹介（各自２分）

ウォーミングアップ

１１：００　　講義：「精神障がい者の地域生活支援の現状」

講師：平澤　恵美　先生

１１：５０　　昼食

※お弁当と飲み物をお配りします。

１２：５０　　（休憩時間１時間）

午後の部

１２：５０　　講義：「べてるの家」とは，

ゲスト講師：小林　茂　先生（以下ワーク終了まで）

１３：２０　　休憩

１３：３０　　講義

１．　認知行動療法事始め

２．　SST と当時者研究を学ぶ

１５：３０　　座席移動（テーブルを片付けて椅子のみでセッティング）

休憩

１５：４０　　演習

認知行動療法ワーク＋統合失調症ワーク＋SST ワーク

１７：４０　　休憩

１７：５０　　講師への質疑応答

クールダウン・振り返り

１８：００　　レポート作成

１８：４０　　提出（各自提出次第退室可能）

お疲れ様でした。

※20 時より，館内レストラン（正面玄関入って右）にて懇親会が開催されます。レポートの提出や名札返却がすみましたら，お忘れ物のございませんよう１階へご移動願います。レストランまでの経路に，フロントがあります。その隣にラウンジスペース，向かいにトイレも配置しています。

★ゲスト講師紹介★

（本学ホームページ「全国で活躍する在学生・卒業生たち」より抜粋）

小林　茂さん

社会福祉法人 浦河べてるの家

べてる生活サポートセンター長　サービス管理責任者

2004 年度　第 1 期卒業生

小林さんのプロフィール

1967 年生まれ。教会の牧師活動をしながら、2003 年度 日本福祉大通信教育部に編入。2005 年 3 月 通信教育部を卒業後、2007 年 3 月には、日本福祉大学大学院 社会福祉学研究科心理臨床専攻課程を修了。現在は、臨床心理士、日本キリスト教団牧師としても活動している。

臨床心理士としての日常

小林さんは現在「浦河べてるの家」のべてる生活サポートセンターのセンター長という立場で業務にあたられているわけですが、日常的にはどんな内容の業務をされているのでしょうか？

私の専門は臨床心理ですが、ソーシャルワーカーのような仕事もしています。自分の仕事を臨床心理的地域援助の実践と捉えています。朝は 8 時 45 分に出勤し、当事者スタッフも含めた事務スタッフ、べてる就労サポートセンターのスタッフが集まって業務報告をします。生活支援のスタッフは、朝の服薬支援等をした後の 9 時 30 分に集まります。私の場合は、生活の支援部門の責任者なので利用者の生活に関する様々な細かい確認も必要です。利用者の状態などで支援上のテーマが挙がれば対応を考えていきます。私の場合、法人の事務も兼務しておりますので、福祉サービスの申請などの事務作業もします。同時に、利用者さんからの相談、ケース会議やカンファレンスといった支援会議、必要に応じてドクターや医療相談室のソーシャルワーカー、権利擁護の支援者といった人たちと意見交換します。午後からはできるだけ支援計画書の作成などに集中したいところです。夕方からは各住居の住居ミーティングが開かれるので出席します。毎日が慌しく過ぎていきますね。

小林さんは臨床心理士でもありますが、「べてるの家」で働くスタッフには、小林さん以外にも専門職がいるのですか？

べてる就労サポートセンターでは、ソーシャルワーカー、看護師などの専門職の常勤職員が務めています。べてる生活サポートセンターでは、私以外の常勤職員はいません。他は全員がパートの非常勤職員です。ですから、専門職といえども役職上にかかる業務といった専門外の仕事、つまりグループホームの入退居にかかる書類や支援計画などの書類作成・申請などは私がします。それから、世話人さんや生活支援員さんの仕事は、彼らしかできない役割や専門性があります。彼らには非専門家の専門性があるのです。彼らは有資格者という意味で専門家ではないのですが、異なった専門性があるのです。当事者の力を信じて支援していくには、非専門家と呼ばれる人たちの存在と彼らの専門性が重要だと考えています。ですから、専門家の持つ専門性も必要とされますが、専門家と呼ばれる人ばかりいても困るわけです。私としては、非専門家と見做されがちな世話人さんらの専門性を活かし、当事者らへの良い生活支援に結び付けていくか、常に考えなければならなりません。具合の悪くなった当事者を直に支援する世話人の仕事は大変です。彼らのメンタルヘルスの支援も必要となります。その点、私の専門は後方支援だといえます。

べてるの家と小林さんの原点

べてるの家」については、本になったり映画になったりと、全国的な知名度も高まり、興味を持った人々が浦河まで足を運ぶと聞いています。

そうですね。たしかに全国から毎年たくさんの見学者が訪れてくれています。ここ数年は、年間 3000 人ほどの人たちがべてるの家に訪れます。ありがたいことだと思います。ただ私としては、全国の人たちに知られること以上に大事であると考えていることは、浦河という地元のつながりです。浦河という地域あっての「べてる」と考えています。今、お話しているこの場所、「カフェぶらぶら」も「べてる」の地域の拠点となるように開設しました。このカフェ事業も「べてる」の就労サポートセンター事業の一つです。元々ここにはべてるの商品の販売コーナーがあったのですが、地元の製品を売っても地元の人は買いにきません。地域交流の場として機能していなかったわけです。そこで、東京に拠点を置く「文化NGO　なまけもの倶楽部、カフェスロー」と連携しながら構想を練って、地元の業者にも関わっていただき、ここを改装しました。内装は、「地元志向」「人にも自然にも優しい」というコンセプトで、蝦夷松などの地元素材を活用し、「ストローベイル方式」というワラを積んだ物に地元の土を塗り固める工法をとりました。地域の人にも一緒に参加していただいたワークショップで作業を行いました。「ぶらぶらカフェ」も当事者スタッフが調理、接客、物販販売を担っているので、経営を不安視する人もいるでしょう。幸い、そうした心配は杞憂ですんでおります。「べてる」が大切にしている理念に「偏見差別大歓迎」「利益のないところを大切に」「それで順調」「安心してサボれる会社」「昇る人生から降りる人生」などがあります。いろいろな問題が毎日のように発生しますが、いつも予定通り「それで順調!!」ですからね。これからもやっていけると思っています（笑）。

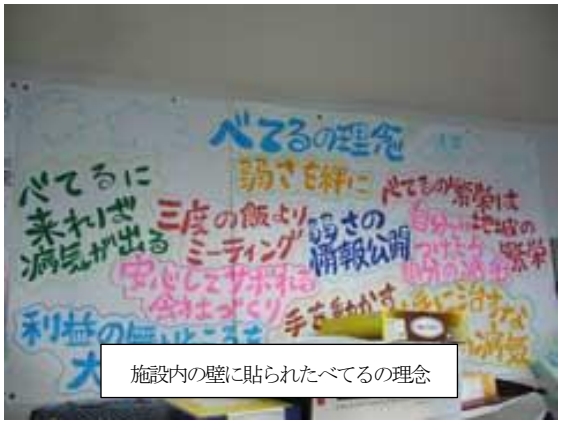
カフェぶらぶら外観

カフェぶらぶら店内

「カフェぶらぶら」は、本当に居心地のいいカフェだと思います。ところで、小林さんは今こうして「べてるの家」の生活部門のサービス管理責任者として活躍されていますが、小林さんの福祉の原点はどこにありますか？

私の原点は、実は教会の牧師としての活動からとなります。牧師養成の大学を卒業し、名古屋で教会の牧師を始めましたが、その地域の教会活動から立ち上がった知的障害分野の施設のお手伝いをすることになりました。その時、初めて身近に障害のある人と接することになったのです。正直、障害を持った方との関わりに戸惑いました。そして、福祉のことをまったく知らない自分を省みることになったのです。それから、施設で働く福祉のプロの人たちの姿からも学ぶものがありました。意図せず、福祉のことを知らない門外漢の私が福祉現場に携わることになったわけですが、いい加減な気持ちでお邪魔するようではいけないと感じたわけです。それで、私も福祉のことを学び、福祉の現場で働く方々と同じように関わりたい、と思ったのです。

（紙面の都合上記事のすべては掲載しておりません，興味のある方は本学ホームページをご覧ください）



施設内の壁に貼られたべてるの理念

当事者研究の様子